



鳥取県八頭郡郡家町

山路遺跡発掘調査報告書

県道大坪～隼停車場線拡幅工事に伴う発掘調査

1974

郡家町教育委員会

はじめに

文化財保護の重要性が強く呼ばれている今日、本町には埋蔵文化財が多数存在しておりますので、これらの埋蔵文化財を始めとする貴重な文化財を保護するため、郡家町では文化財保護条例を制定し、町民の文化財保護意識の高揚に努めているところであります。

このたび、県道大坪～隼停車場線拡幅工事に伴い、山路1号基にかかるため県当局に路線変更等の折衝を重ねてまいりましたが、工事の施工上やむなく発掘調査をすることになりました。

当教育委員会は、鳥取県教育委員会文化課の御指導によって発掘調査を完了し、その結果をここにまとめることができました。

この発掘調査を実施するに当って、御指導いただいた県教委文化課の諸先生を始め、御協力いただきました鳥取県土木部道路課および郡家土木出張所、その他関係各位に対し、本調査報告書をもって深く感謝と敬意を表します。

昭和50年3月

郡家町教育委員会

教育長 石谷 収

目 次

1. 発掘調査に至る経過	1
2. 遺跡周辺の環境	1
3. 発掘調査日誌(抄)	2
4. 発掘調査の概要	4
5. 遺 物	5
6. ま と め	9

山路1号墓発掘調査団の構成

調査団長	郡家町教育委員会 教育長	石 谷 収
調査団員	郡家町文化財専門委員	北 川 時 治
	"	三 木 薫
	"	木 村 鶴 藏
	"	入 江 清
	"	山 崎 聖
	"	森 岡 弥寿夫
	"	栄 田 光 夫
	"	上 鳩 武 夫
	"	岡 本 君太郎
指導	鳥取県教育委員会文化課	野 田 久 男
測量	西日本建設コンサルタント㈱	綾 木 章 治
	"	石 原 重 美
	"	浜 部 薫
作業員	八頭郡郡家町大字下津黒	衣 笠 元 敦
	" 大坪	市 村 淑 子
	" 山路	中 村 美代子

1. 発掘調査に至る経過

鳥取県八頭郡郡家町大字山路は下私都地区にあり、郡家町においては中心部よりやや北東部に位置しており、戸数12戸の小部落である。この付近の遺跡は猫山（標高500m余）山系が下私都平野に懐曲状に突出した先端部およびその山あいの斜面に位置し、これに対向的に東に位置している山田部落背後の丘陵性山地にもたくさんの遺跡がある。

今回発掘調査の対象となった遺跡は、山路部落の南方約20mにあり、猫山山系の一支脈上の山林中に構築された数基の中世墳墓のひとつで、最下位に位置している。従来、県道大坪～隼停車場線は、この支脈突端部の真下をほぼ南北に通じていたが、今回幅員を拡張することになった。

しかるに、この遺跡所在の突端部を回避して道路を拡張すれば、前面の樹園地を買収しなければならないが、この樹園地は水田転換特別対策事業で永久転作したもので現在買収不可能なものである。

従って、やむを得ずこの遺跡所在の丘陵端部の切削の交渉が開始された。

郡家町教育委員会は昭和49年7月19日、鳥取県教育委員会文化課および鳥取県土木部道路課・郡家土木出張所と遺跡の保護について協議し、7月24日には町文化財専門委員（9名）を召集して意見を聞いた。その結果地元の要望、水田転換特別対策事業、工法、交通安全等の関係上やむなく発掘調査することに決定し、文化庁にこの旨届出して、8月21日より10月29日まで同遺跡の発掘調査を実施した。なお、遺跡周辺の樹木を伐採したあとで、郡家土木出張所により表面に散乱していた五輪塔の多くは撤去されており、正式調査に着手した段階では表面に見えていたのはごくわずかであった。

2. 遺跡周辺の環境

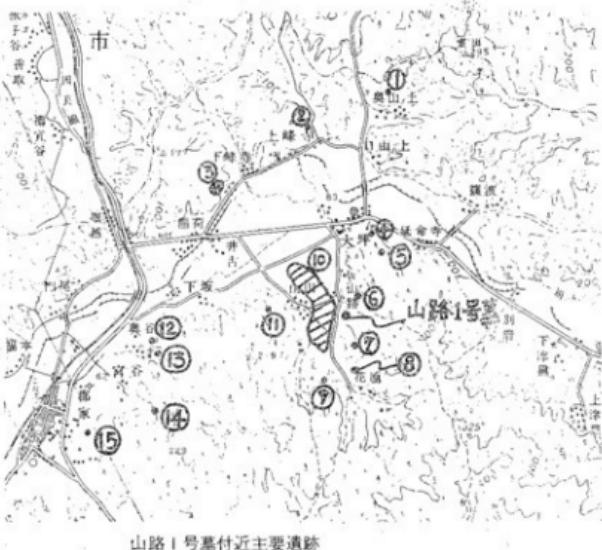
郡家町大字山路付近一帯の基盤岩石は、石墨、白雲母千枚岩、黒雲母片岩および粘板岩である。この基盤上に大山、鳳ノ山および水ノ山などの火山噴出物（赤色土層）が厚く堆積している。10余年生のナラ、クヌギ、その他雜木および松樹混生の自然林が多く、緩斜面や谷あいは開墾され樹園地（梨）が造成されている。また、山路部落西側の平野には、幅員約1mの小田川および花原川の自然水を灌漑用水として水田や畠地があったが、昭和47年に水田転換特別対策事業が施工され、約35haにわたる広域樹園地（梨）にかわっている。

本地区は旧村名の示すとおり、名代（私部）部民の居住地と推定されているが、その史実は明確でない。なお、平野部には水田区割、水路および道路等の条里造構らしいものが航空写真によって推定されていたが、昭和46年の県営は場整備事業により消滅した。また、付近の山地には前方後円墳數基を始め多数の円墳および古代須恵器窯跡が広範囲にわたって分布し、磨製石斧も発見されている。なお、平野部の樹園地を造成するにあたり、水田を掘削して溝渠を敷設したところ、地下約70~100cmの層から欠損磨製石斧1個と弥生式時代後期から奈良・平安時代におよぶ土器、須恵器が出土した。

この土器中に厨房用品が多数あるところから、この地は当該時代の住居跡を推定し得るようであるが、造成工事が極めて短時間の間に完了し植樹したので調査が不可能であった。

おおむね おもむろ

次に本遺跡西方約1kmの下坂字東尾平では丘陵麓において弥生中期の袋形縄文陶器が発見されている。さらに北方約1kmの大坪部落にはもと金峰山莊樂寺があり、天正9年羽柴秀吉の鳥取城討伐の際に兵火にかかると焼失したと伝承されている。その他、この付近には中世の古城跡が多数あり、先述のようにこの遺跡地をめぐって、原始から中世に至るまで多数の歴史的事実を読み取れる遺跡および記録が現存している。



- ① 奥山ノ上1号墳
- ② 下峰寺14号墳
- ③ 下峰寺経塚群
- ④ 大坪4号墳
- ⑤ 大坪城跡
- ⑥ 山路1号窯跡
- ⑦ 山路3号墳
- ⑧ 花原第2遺跡
- ⑨ 花原第1遺跡
- ⑩ 山田遺跡
- ⑪ 下坂遺跡
- ⑫ 比丘尼城跡
- ⑬ 花谷窯跡
- ⑭ 京が塚経塚
- ⑮ 寺山古墳

3. 発掘調査日誌(抄)

昭和49年8月21日開

山路1号墓付近平面測量、樹木伐採、写真撮影、土器片、五輪出土

8月27日開

表土取り除き作業、木の株取り除き作業、写真撮影、土器片、五輪出土

8月28日開

木の株取り除き作業、骨片、銅鏡、土器片、五輪出土

8月29日晴

造り方測量準備

8月30日晴

造り方測量準備

8月31日晴

造り方測量

9月3日晴

〃

9月4日晴

〃

昭和49年9月5日	晴	遣り方測量
9月6日	晴	"
9月7日	晴	遣り方一部取り除き作業
9月11日	晴	写真撮影、出土五輪番号付け
9月12日	晴	第2層土発掘作業、骨片、土器片、五輪出土
9月13日	晴	" 骨片出土
9月14日	晴	" 土器片出土(片口小壺)
9月16日	晴	" "
9月17日	晴	遣り方測量準備
9月18日	晴	遣り方測量
9月19日	晴	遣り方測量、断面測量
9月20日	晴	" "
9月21日	晴	第3層土以下発掘作業、五輪出土
9月24日	晴	" 骨片出土、出土品水洗
9月26日	晴	土器片出土
9月27日	晴	" 人骨出土
9月28日	晴	"
10月1日	晴	" 出土品の復元
10月3日	晴	"
10月4日	晴	" 断面測量
10月5日	晴	"
10月7日	晴	" 土器片出土
10月8日	晴	"
10月9日	晴	発掘面整理、現場清掃、発掘終了
10月11日	晴	作業道具片付、出土品整理
10月12日	晴	発掘結果中間報告
10月15日	晴	出土品復元作業、図面整理
10月16日	晴	" "
17~19日	"	"
10月28日	晴	報告書作成、土器・石造遺物の実測、拓本取り
3月15日	晴	山路遺跡発掘調査報告書発刊

4 発掘調査の概要

今回、発掘調査を実施した遺跡は山路1号墓と呼ぶ中世の墳墓で、同じ丘陵上の一級高い部分に位置する2号墓も同様のものと考えられる。(図版1の1, 2)

調査開始時の遺跡の状況は、墳丘上の樹木は既に伐採され、表面に転がっていた五輪塔などは、埋没して一部分顔を出していたものを除いて、全体の半数以上が取り去られていた。そこで、墳丘周辺の清掃後地形の測量と写真撮影を行った。(図版2の1, 図版6の1・2)そして、方形を呈する墳丘上に土層観察用のアゼを十字状に設定し、墳丘表面に露出している葺石状の川原石およびそれらの間に埋められた小礫、残された五輪塔の測量を行った。

作成した平面図と墳丘上の観察結果を勘案したところ、墳丘中央部分には比較的大きい川原石が無秩序に散乱していて小さい礫が少なく、また褐色土があらわれていること、さらに墳丘とその周辺部分で人骨の小片や古備前焼と思われる大きい壺の破片等が検出されたことなどから、この墳墓は古く盗掘を受けていたことが予想された。

次に規則的に並ばない転石と表土などを約20cm除去したところ、30~40cmの大川原石を用いて墳丘のはば全面を葺石状に被っていることが判明した。墳丘の規模は約1.3mの高さをもち一辺6mの方形で、しかも、南西側と北西側には掘からおよそ1.5m離れたところに墳丘上の川原石と同じ石を直線的に配していた。この段階では石と石の間から小さな破片となつた人骨や藏骨器と推定される壺の破片があらちこちで出土し、墳丘の西側コナーでは裾に堆積した表土に近い褐色土の中から銅鏡も1枚検出された。しかしながら遺物はどれをとっても原位置を保っていると思われるものではなく、すべて二次的に堆積した状況の中で発見され、墳丘中央部分の葺石状石材もほとんど遺存せず盗掘による破壊が行われたことはほぼ間違いないものと思われた。五輪塔はかなり数多く出てきたが、墳丘上と据部で移動した状況で出土し、地輪も1~2個ほど水平に置かれた状態で出てきたけれども、他はすべて動いていた。これらの多くの五輪塔に混じって墳丘上北東側に五輪塔や宝瓶印塔の相輪が破片となって検出されたが、基礎や笠などはなく南東の据部を中心に五輪塔や宝瓶印塔の塔身が故意に破壊された状態も明らかになった。

実測終了後、石を除去し区画ごとに掘り下げを行ったところ、墳丘のはば北ないし北西側の半分は地山がもともと低いためか、盛土はやや厚く積まれており、石はほとんど混じらない。また遺物や人骨片も全く出土しなかったが、ほぼ中央部で表土から約1.3m~1.4m下のところで黒緑色土に混じって灰の小片と灰が若干検出され、深さは堆積の厚いところで約15cm前後であった。(図版7の2)しかしこの黒緑色土は平面的に追究しても極めて不整形でまとまりがなく、人骨は一片も確認できなかった。

最後に、墳丘の北東側の据部を中心に崩れた川原石や土を排除したところ、調査前の予想では一番ひどく崩れているものと考えていた墳丘最下段の石積みがよく原形を保っており、基底部は大きい石

を利用してかなり堅固に構築されていて、最もよく遺存していることが判明した。（図版3の2）

なお、調査の結果墳丘上の北東側には墳丘の裾から約1.5m離れた位置には直線的な川原石の配置は見られず、南東に面する頂上側にも石の配列はなかった。しかし、東のコーナー部分が現存長さ1.4m、幅0.8mほど突出して他のコーナーと様相を異にしており、今のところ適切な説明が見つからない。ただ、盗掘や崩れによって移動した川原石でないことは、石材の面が直線状にそろって意識的に積まれており、しっかりした堆積土の中に埋まっていることなどからはっきりしている。これについては今後も検討を加えるべき課題であろう。（図版7の1）

墳丘の構築について若干ふれて見ると、尾根の先端部の表土を除き地山を出してから傾斜をもったまま6mの正方形に基底部の石を並べ、その中に高さ約1mくらいまで土を積みあげている。そしてその上に葺石状の石を配置し、その間隙を小礫 majority の土で埋め、地山の傾きを墳頂部で調整してほぼ平坦にしている。中央部分には多分鐵骨器を納め、上に五輪塔や宝険印塔などをたてていたものと推察されるが、盗掘による攪乱のためか平面的にも土層観察用に残したアゼの断面でも、主体部の掘り方と思われるものは確認できなかった。

5. 遺物

山路1号墓の発掘調査によって出土した遺物としては、五輪塔を主体とする石造遺物が大部分を占め（図版3の1）、あとは若干の土器類と剣銛である。これらの出土遺物は、調査の結果すべて移動堆積したものであり、遺構と関係して原位置のまま発見されたものは皆無である。

鳥取県内における中世墳墓の正式発掘は過去において前例がなく、この時期の遺物の編年もできない現状であるから、詳細は今後の研究に待つべきであろう。以下それぞれの遺物について略述することとする。

(1) 土器

① 四耳壺……陶製鐵骨器

出土した土器のうち最も大型である。（図版4の2、8の1）この墳墓の中心主体として使用されていたものと考えられるが墳丘の中心部からは出土せず、墳丘の裾部や肩に近いあたりで多くの破片となって発見され、5mくらい離れて出土した破片同士が接合可能であったりして、かなり広範囲に散乱していた。

鉢高28cm、口径12.6cm、胴径約23cmの壺で、約 $\frac{1}{3}$ 近く破片を失っているが幸いには壺全形がうかがえる。口唇部から肩部にかけては完全で、肩部には11cm～12cm間隔で4個の耳が付けられており、この部分には焼成時に灰がかかっている。口縁は肩部から垂直に近く立ちあがっていて、内外面とも丁寧になでて仕上げをしている。また脚部から底部にかけてはかなりの凹凸を残したまま仕上げをして、脚部を中心にして胎土中には直径7～8mmの砂粒も見られる。次に内面

を見ると口縁部と肩の境には粘土をつぎ足した痕跡がのこり、指先で押さえて成形したことが知られる。胴部内面はほぼ全面にながみられ、底部から5~6cmあがった部分には、指頭圧痕など成形時の状況を示すものが観察できる。全体としては比較的丁寧な仕上げで内外面ともながである。色調は赤褐色を呈し、焼成も良好で堅緻である。

県下における出土例はさほど多くないが室町時代中期頃のものと推定しておく。なお、この壺の製作地としては、中国山地を越えた岡山県の備前古窯が考えられる。

調査終了後に行なわれていた鉄道工事の際、調査地点よりさらに北斜面から完形の古備前焼の壺が発見されたが、これは、調査した山路1号墓から転落したまま埋没していたものが工事のために出土したものと思われる。(図版4の3)

この壺は高さ187cm、口径は長径で11cm、短径で10cm、胴の最大径166mmの大きさで赤褐色の肌に焼きあげられ表面にはなでの波が見られるけれども滑らかではなく胎土も悪い。壺の中には1号墓の表土と同様な黒色土が流入していて、わずかながら火葬骨も残っていたことから、葬骨器として使用されたものであることは疑いない。

いご

また、この壺と同様のものが北西約1.5kmの郡家町大字井古字土井鼻(通称ベザイ)から、中世の五輪塔に伴って発見されていて、やはり葬骨器であったと伝えられている。

② 片口小壺

9月14日、墳丘の東隅近くの第2層黒褐色土の取り除き作業中に出土した。(図版4の4、8の2)これは高さ13cm、胴径12cmである。この壺もいくつかに割れていたが復元されて全形がわかる。まず口縁部分は強く外反し、一方に口を設け、口を構成している口唇部の外側は面取りを施したように縁を取っている。そして、口縁部は内外ともきれいになでつけて整えられていて、内側には白色および緑色の釉が見られる。肩部はあまり張らず胴部中央で張る。口を設けた側の胴部には『++』状の鏡面の窓印が文様的要素を兼ねて大胆につけられている。胴部の内側は、上半分は丁寧にならして凹凸を消しているが下半部は残ったままである。底部はややあげ底を呈し仕上げは粗雑である。胎土中に砂粒が混入しているが焼成は良好で、全体的に淡い褐色をした釉がかけられている。そして肩から胴の半分にかけて、白や緑の釉がつく。県下では、この時期の比較すべき資料はあまりないが一応さきの四耳壺とあまり隔たらない頃のものと考えられる。

③ 土師質土器

これは、墳丘の中央部に近いところや南東側の墳丘裾部などで検出された軟質の焼きの小皿でいわゆるカワラケばかりである。(図版8の3、8の4)

a) 図版8の3に示すものは墳丘の中心に近い松の木の根元で、褐色土の中から出土した。全

体の半分ばかりしかなく非常に軟らかいためによく磨耗していて内面底部の有無などは十分観察できない。底はしっかりした平底になっていて、内外とも表面をなでたもので底部には糸切りの痕が残る。口唇断面は単純で、明るい淡褐色の土器である。

④ 次にやはり松の根元の崩れた黒色土層の中から検出されたものについて少し説明する。上述のものより径は大型であるが、器高はほぼ近似して約2cmほどである（図版8の4）これも内外面をなでて仕上げていて肥厚した口唇部をもつ。色調は明るい淡褐色で焼きは軟らかい。これも糸切り底かと思われるが全体の $\frac{1}{4}$ ほどしかなく明瞭でない。以上のほかにも2~3点出土しているが、極めて小片であり特筆すべきものはない。

(2) 銅 錢

表土の除去作業を行ったところ、墳丘西コーナーの崩れ落ちて裾部に堆積した褐色土の中から一枚だけ古銭が発見された。（図版4の1）表裏ともサビがついているけれども完全な形であり直径は23cmある。そして中央に方孔を穿つ。文字は比較的よく判読できる状態で、熙寧元宝（北宋の神宗1068年初鋤）である。

(3) 石 造 遺 物

調査によって出たものとしては五輪塔と宝鏡印塔の2種類の石塔があるが、宝鏡印塔は笠、塔身および相輪の残欠がそれぞれ1個ずつ出土しただけであり、大部分は五輪塔である。調査を実施した山路1号墓の近くには調査直前に測量や供養の目的で、墳丘とその周辺から集められたものと、調査中に土中より掘り出されたものが積み上げてあり、両方を合わせた個体数は次のとおりである。
地輪30、水輪89、火輪63、風・空輪124、ただし、この中には上の山路2号墓から落されたものや近くの道ばたにあったものなどを、ここへ運んだといわれていることから、1号墓の被葬者と関係なく集積された五輪塔も相当数含まれている。

① 五 輪 塔

各輪ともバラバラに調査区域のあちこちから発見されたもので、造塔当初の原位置を明瞭に示すものはない。いずれも軟かい凝灰岩を加工して製作されたもので風化のひどいものも含まれている。そして製作された時期にもかなりの幅があるようと思われるが、室町時代中期から安土・桃山時代にかけてのものが多いようである。これらの五輪塔は、墓標として造立されたものか、供養塔としてたてられたものか問題があるところであるが、遺骨や遺髪を納めるために孔を穿ったものではなく円相や、蓮花座、格座間などの装飾をもつものもまた見つかっていない。調査した五輪塔はすべて4個体から構成されるものばかりで、一石五輪は1基もない。

a) 地 輪

高さ14cm、幅22cmぐらいのものが多いようである。底面の中央に孔をもつものなども全然ない。ただ一つだけ、四方に発心(東)、修行(南)、菩提(西)、涅槃(北)の四門の徳を象徴する仏すなわち胎蔵界四仏を表わす種子の「ア・アー・アン・アク」を彌研彫したもののが特筆される。(図版5の1~4)これは葺石状に上下二段に並べられた川原石のうち、上段のものと並んで発見されたものであるが、この地輪の下には安定させるための何らの施設もなく褐色土の上に直接水平に据えていた。周辺からはこれと組合わせる種子を彫り込んだ五輪塔の部分は出土していない。この地輪に近く、墳丘の南側肩部のあたりで出土した地輪も水平のままで出てきたが、これも下に隙を敷いて固めるなどの方法はとられていない、骨の小片が周辺とこの地輪の真下にいくつか置かれていた。

b) 水 輪

球形の上下を水平にカットした形で、高さ15cm、球形中心部の径2.2cm、切口の上部径・下部径ともに1.2cmくらいのものが一般的である。これに孔をもったものではなく、種子や円相の施されているものもない。

c) 火 輪

軒口の切り方は中世に普通行われた垂直のものが多く、斜めのものがごく少数混じる。軒下端の幅は2.0cm、上端の幅は2.1.5cm、軒口の厚さは中心部で4cmくらいの規模のものが平均である。そして高さはあまり高くなく、軒が反っているものがほとんどである。

d) 空・風輪

空輪部は上端の径1.2cm、下端部の径+0cm、高さ11cmの宝珠形で、風輪部は上端の径1.2.5cm高さ2.5cm前後のものが主流である。この空・風輪の中には扁平な形を呈するものも見られる。

② 宝鏡印塔

本遺跡で出土したのは、宝鏡印塔の各構成部分のうち、塔身と相輪と笠の部分であり、いずれも完全な形ではない。

a) 塔 身

凝灰岩製で破片となっていて全形がわからない。故意に割ったと考えられるほど散らばって出た。かなり古く荒されたものと考えられ墳丘の裾部に埋っていた破片もある。

6) 笠

軒部より上部を失っていて正確な形状と大きさは判明しない。軒部より下は二段につくり、径 8.5 cm、深さ 6 cm の円孔がある。軒部は厚さ 4.5 cm、幅 2.9 cm であるがこの上に何段あったか、また、両飾突起の形なども全く推定できない。

6) 相輪

層塔・多宝塔・宝塔など宝鏡印塔以外の各種の石塔のものと区別がつきかねるが、五輪塔を除けば宝鏡印塔の笠部と塔身しか出土していないので、一応ここで扱う。残っているのは相輪頂部の部分で大きさは宝珠の最大径 1.8 cm、高さも 1.8 cm である。諸花は複弁七葉を陽刻している。調査後に調べて見ると、このほかに相輪部分が 2 つあり、調査前に移動されたものと考えられる。1 つは、上述のものと同様に頂部だけを遺存し、他は相輪下部で九輪の一部と諸花の部分である。宝鏡印塔の最近の出土例は、鳥取市白兎身千山のものがあり、相輪の上半分を失っているが、他は完全に壊っていて、室町時代中期頃のものと推定されている。

(4) 人骨

調査開始直後の墳丘上清掃中に早くも小片が出土し表土をはぐと墳丘のほぼ全面から出てくるような状態であった。出土状況は表土から第二段目の葺石状の配石面に至る褐色土を中心にして、あたかも火葬骨を墳丘築成時に撒布したような印象を受けるほど土巾や川原石の下から無造作に出土した。

これらの人骨は、ある程度かたまって出土する傾向があったものの、土壤の掘り方などは全く検出できず、墳丘の中央部では盗掘のためか、あるいは藏骨器を埋めたためにもともと撒かなかつたのか出土は少なかった。量的にはかなりあったけれども、破片は非常に小さく歯は見つからなかつた。

6. まとめ

本遺跡は、鳥取県教育委員会による昭和 48 年度の埋蔵文化財分布調査によって確認され、その時点では墳丘上の五輪塔は後世に他の場所から運ばれたものと考えて、中世墳墓ないしは経塚の可能性を考慮欄に記入しながらも、一応方形墳として改訂・鳥取縣遺跡地図第二分冊に登録されていた。

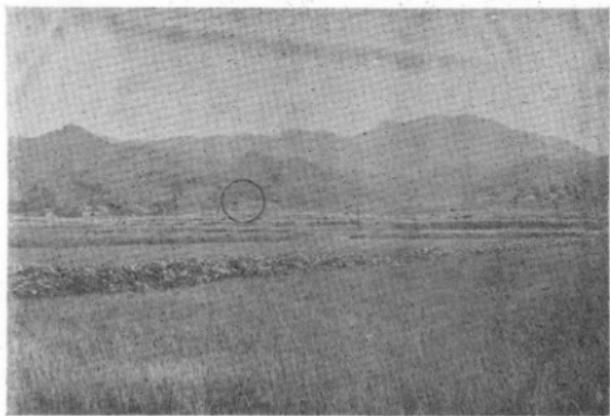
しかしながら、今回の発掘調査によってこの遺跡の性格は、室町時代中期から安土・桃山時代に至るまでの五輪塔を伴った中世の墳墓であることが明白となり、同一丘陵上に並ぶ頂上側の方形墳状の遺跡（山路 2 号墓）も古墳ではなく、やはり五輪塔を伴い川原石を利用して築成した中世墳墓であることはほぼ確実となった。

調査対象となつた 1 号墓の墳丘とその周辺で石塔が多数出土しながらも、すべて調査前に動かされていて、遺構と結びつく形で発見されたものが 1 基もなかつたことは残念であった。また五輪塔も多

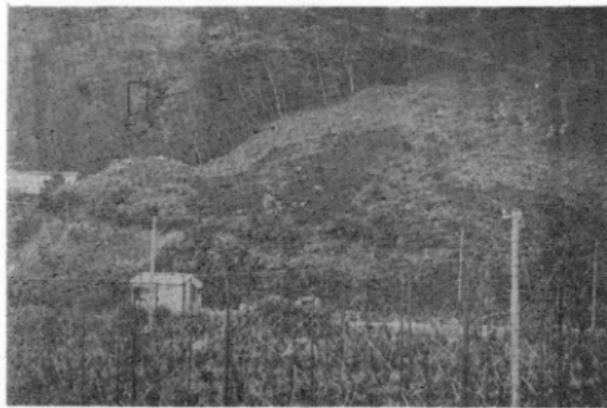
量に散乱しているために、当初の組合せが推定可能なもののは一つもない。墳墓の中心部は既に密掘されており、2個の蔵骨器も掘り出されて碎かれたり転落してしまっている。墳丘を構築した遺構の状況は比較的良好に遺存し、川原石を主体に方形の基壇状に墳丘を築き、頂部を葺石のごとく石を二重に敷きつめて堅固にしたうえで恐らく中央に複数の主体を古墳前の壺を蔵骨器として利用し、わずかな副葬品をそえて葬っていたであろうことが推定できた。そして墳丘上あるいは墳丘の裾部で出土した五輪塔と宝幢印塔は、墓碑としてのもののはかに、追善供養のためのものも相当あるであろう。

今後は、この調査によって出土した五輪塔などの正確な実測図をもとに形式の変遷を追究し、県下の編年の一助とする必要がある。そして、今は既に消滅した山路1号墳の調査結果を中心の墓制、宗教觀等を一層明らかにするための一資料として十分に活かし、歴史考古学の一分野に貢献させることが重要な課題であろう。

現段階では、比較すべき県内の資料も乏しく、将来各地でこの時代の調査例が増えたときに、再度この調査結果に十分な検討を加える必要性を痛感する。



1. 山路 1 号墓遠景



2. 山路 1 号墓近景

2.



1. 調査前の山路1号墓側面(南から)



2. 調査中の山路1号墓(南東から)



1. 出土した五輪塔



2. 山路1号墓道橋(東から)

4.



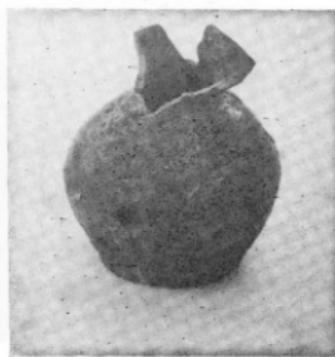
1. 銅銭



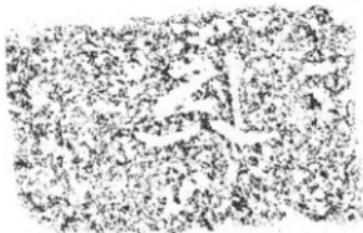
2. 四耳壺(陶製蓋骨器)



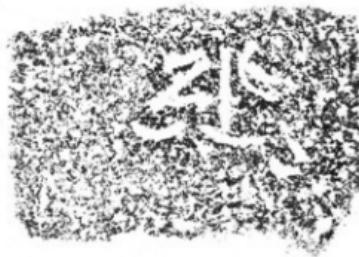
3. 工事により北斜面
から出土した壺



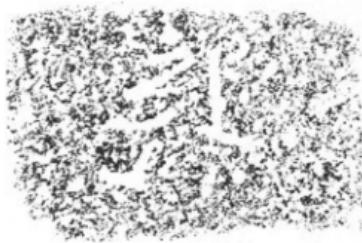
4. 片口小壺



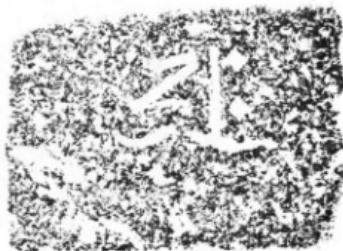
1. 種子拓本



2. 種子拓本



3. 種子拓本



4. 種子拓本

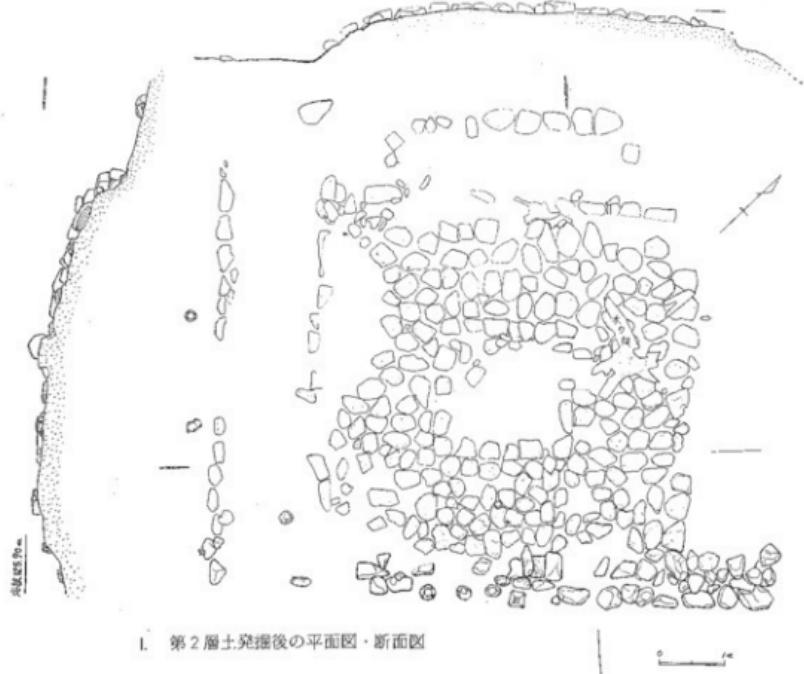


1. 山路1号墓实测图



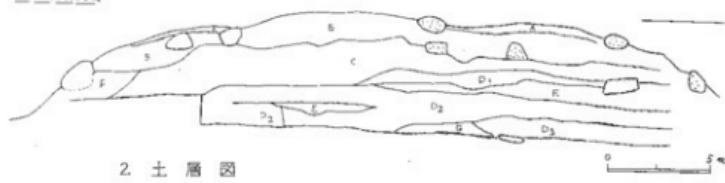
2. 山路1号墓附近实测图

海抜 125.90m



I. 第2層土発掘後の平面図・断面図

海抜 125.90m

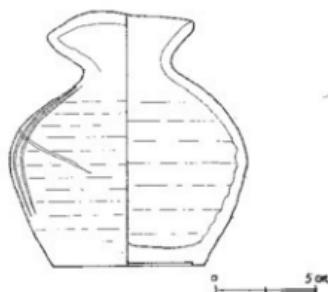


2. 土層図

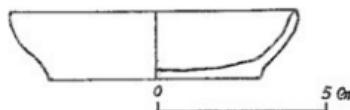
- | | | |
|-----------------|--------------------------------|------------|
| A-----黒褐色土 | D ₁ -----黄褐色土 | E-----紫色土 |
| B-----赤褐色土 | D ₂ -----紫色土まじり黄褐色土 | F-----褐色土 |
| C-----褐色土まじり紫色土 | D ₃ -----黒緑色まじり黄褐色土 | G-----黒緑色土 |



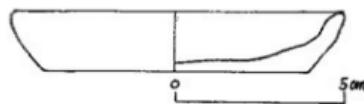
1. 四耳壺（陶製藏骨器）実測図



2. 片口小壺実測図



3. 土師質土器実測図



4. 土師質土器実測図

鳥取県八頭郡郡家町

山路遺跡発掘調査報告書

昭和 50 年 3 月 15 日

発行：郡家町教育委員会

編集：郡家町教育委員会